



雲青き

さいたま市立大成中学校 学校だより

2月号 令和7年2月3日

相手を敬う

校長 福田博志

年末から1か月間、様々なスポーツの大会が行われておりました。私は、スポーツを見ることが好きなので数多くの競技をテレビで観戦しました。サッカー、駅伝、バスケットボール、バレーボール、テニス、相撲、スキーなど。その中で、特に印象に残っているのが、1月13日に行われた大学ラグビー日本一を決める試合でした。帝京大学対早稲田大学で、試合自体も面白かったのですが、目を奪われたのは、そのあとの行動です。閉会式となり両校選手がグラウンドに一列に整列しました。優勝した帝京大学の選手たちが賞状や優勝カップ、トロフィーなどを次々と受け取るのですが、その前後に必ず敗れた早稲田大学の選手に向かって深々と一礼していたのです。私の目には、とても清々しく（すがすがしく）映り感動しました。



私はラグビーについて詳しくありませんが「ノーサイド」（試合が終われば敵味方なく相手をたたえ合う）の精神なのでしょう。ラグビーの大会では、いつもこうしているのか、帝京大学がたまたまそうしたのかは、わかりません。いずれにしても今まで全力で激しくぶつかり合って、闘っていた相手に対し、試合が終わって敬意を表していることが伝わってきました。

私が長く続けている剣道も相手があってできる武道です。「礼に始まり、礼に終わる」一度は聞いたことがある言葉でしょう。ここでいう「礼」とは、ただ頭を下げればよいという形式的なことではなく、相手への感謝や敬意を含んだ心のありさまを意味しています。剣道は、竹刀で相手を打突する競技です。「礼」のない剣道は、相手をたたいたり突いたりするだけのただの暴力になってしまうでしょう。

剣道愛好家の間で「打って反省、打たれて感謝」という言葉があります。相手を打って「ヤッター！」打たれて「クッソー！」では剣道ではありません。打たせてもらい、どうして打てたのかを省みる。打たれて自分の弱いところ、未熟さを教えてもらい、相手に「ありがとうございました」と感謝する。剣道は、相手がいるからこそ自分自身を鍛え高めることができるという教えです。

帝京大学の選手たちの一礼には心が見えました。それで印象に残ったのだと思います。大成中の皆さんもスポーツに限らず、人との出会い、読書、授業などの日常の中から「感じとる力」を身につけていってほしいと思ったワンシーンでした。